旧門司三井倶楽部

旧門司三井倶楽部の豪華なデザインは、門司が主要な貿易港であった 20 世紀初頭の商社の繁栄ぶりを表している。ハーフティンバー様式の建築と壮麗なヨーロッパ風の内装は、文化的な融合の一例であり、この繁栄した国際港でよく見られるものだ。この建物は 1921 年に完成し、翌年には、日本旅行中の著名な物理学者アルベルト・アインシュタイン（1879-1955）を受け入れている。

門司三井倶楽部は、1876 年に設立された商社、三井物産の従業員や賓客のために建てられた。この建物はもともと三井物産門司支店長オフィスの隣にあり、門司市中心部の東に位置する谷町の山手地区にあった。建物は 1949 年に国鉄に買収され、1990 年に市の所有となった。その直後、門司港駅近くの現在の場所に移築された。

内部も外部もヨーロッパ風

建物のファサードは、1920 年代初頭に流行した欧州建築の影響を反映している。むき出しの木材、スレート葺きの屋根、砂目模様のモルタルはいずれもドイツのデザインを思わせるもので、切妻屋根の窓の非対称性も日本の通例からは大きく逸脱している。しかし、この建物は完全にヨーロッパ風のデザインというわけではなく、北側にある瓦屋根と漆喰壁の 1 階建ての小さな別館は、明らかに日本風である。この別館は倶楽部のスタッフに利用されていた。

倶楽部の内装は、ヨーロッパ風な外観とよく合っている。玄関には、倶楽部の原点が海運にあったことを想起させる満帆の船を描いたステンドグラスの欄間窓がある。ドアを開けると、装飾豊かなマンテルピースとシャンデリアのあるエレガントな居間に続く。右側にはグランドピアノを備えた応接間があり、イベントやリサイタルに使われる。どちらの部屋も、天井のレリーフ、大理石の暖炉、装飾的なマンテルピースに見られるように、アール・デコ様式で調度されている。

1 階にはレストランもあり、ふぐ刺しや焼きカレーなどの郷土料理が味わえる。

アインシュタイン家の訪問

最初の 27 年間、門司三井倶楽部は迎賓館でもあり、2 階には西洋風の客室があった。アルベルト・アインシュタインと妻のエルザ（1876-1936）は、1922 年に 43 日間にわたって日本を訪れてまわった際、2 階のスイートルームに 5 日間滞在した。旅の最後にして最長の訪問地である門司に着く頃には、アルベルトは疲れ果てていた。旅日記にはドイツ語で「私は死んだ。私の死体は門司に戻り、そこでクリスマスのミサに引きずり込まれ、子供

たちのためにヴァイオリンを弾かされた」と書いている。

アインシュタイン・メモリアル・ルームは、アインシュタイン夫妻が滞在していた当時のように改装されている。アルベルト直筆の手紙や、子供達のクリスマス・ミサで演奏したヴァイオリンを手にしたアルベルトの写真がある。

林芙美子を偲ぶ

2階には門司出身の作家、林芙美子（1903-1951）に捧げられた部屋がいくつかある。未婚の両親の間に生まれ、貧困の中で育った芙美子は、社会的に恵まれない人々、特に女性についての物語や詩を書いた。これらの展示室では、彼女が上京する前の数年間の思い出の品、小説の初期版、10代の頃に書いた絵葉書、1932年のパリ旅行日記など、彼女の人生のいくつかの主要な時期を取り上げている。また、彼女の作品が映画化された際のポスターや、晩年に彼女が使用していた書き物機のレプリカも展示されている。